教育研究業績

2024年 5月 1日

氏名　　森川　奈緒美

研究分野	学位
看護教育	看護学修士

研究のキーワード

看護コミュニケーション、臨床判断能力、社会人基礎力

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
看護コミュニケーションスキル教育	2009年 4月1日～	看護コミュニケーションスキルの育成プログラムを作成した。シミュレーションと表現力を育成するための課題を作成し実践させた。対人コミュニケーション能力の向上、また看護師としてのコミュニケーションを向上、また社会人基礎力に対し効果を上げた。そのためのプログラムの作成から実施、検証に至るまで中心的に関わった。 （2010年日本看護学教育学会、2010年日本看護科学学会、2011年日本看護科学学会、2012年日本看護科学学会、2013年日本看護科学学会等、発表）
成人看護学演習　PBLによる看護過程の展開	2011年 4月1日～	看護過程の展開を教授するにあたりPBL学習法を用い授業を展開した。現在までに6事例（胃切除術を受けた患者、糖尿病の患者、乳がん部分切除術を受けた患者、肺部分切除術を受けた患者、肝硬変の患者、心不全患者）を作成した。領域実習に向けて問題基盤型のシナリオから情報収集、アセスメント、問題抽出、計画立案までチューターを通して少人数制で指導する。2018年度からはルーブリックを導入して評価の公平性を確保した。 （2013年日本看護科学学会発表、2014年日本看護学教育学会等、発表）
成人看護学急性期実習　SIM教育実践	2022年 10月1日～	コロナ禍における臨床実習の補填、実践能力向上のため高機能シミュレータ『シナリオ』とブリーフィングには『ふりかえ朗』を使ったシミュレーション教育を実践している。比較的侵襲度の高い処置やケアは臨床実習でも見学にとどまることが多い。また受け持ち患者により学生の学びの満足度が異なるため、急性期での看護実践能力を向上させるには臨床での見学にとどまらず、実際に実戦する経験が必要と考えシミュレーションプログラムを作成し実施するに至る。現在オリジナルに作成した2事例を使っているが、臨床においても新人教育に活用されており、実用性の高いシナリオとなっている。
2　作成した教科書，教材		
成人看護学演習教材「ストーマモデル」の開発	2012年	技術演習に使用するため産学医工連携の一環として業者と提携しストマモデルの開発を行った。学生の皮膚に貼り付けるタイプのもので、患者役をすることによって羞恥心やプライバシーの問題を考えさせる機会とした。何年かにわたり使用したが、はがれやすい状況がなかなか改善できず現在に至る。（2013年東京ビックサイト発表）
成人看護学演習 ナーシングスキルの活用と看護技術動画作成	2012年 4月1日～	技術演習前に手技の確認や、より具体的にイメージをしやすくするため『ナーシングスキル』の活用と、技術動画をオリジナルで作成（喀痰吸引、創傷処置、ストマケア、フットケア、BLSの5項目）した。
実習事前学習用「夏休みの友」作成	2012年～	実習に付随する教材として、実習事前学習として実習中必要な知識等を実習で活用しやすいように冊子として学生に配布。慢性期、急性期、共通という項目を挙げ、実習中はそれを振り返ることにより、学生の思考を展開することができる。

成人看護学急性期SIMアウトライン	2022年 10月1日～	成人看護学急性期実習の教材として、シミュレーションについての教員用のアウトライン(実施要領)を作成した。はじめてシミュレーションを指導する教員でも同様に教育が可能な実施要領になるように工夫した。（教育方法の実践例3.参照）
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 高大連携事業　講師	2012年～	高大連携事業において、高校2年～3年の生徒（30名程度）に対し、創傷治癒に関する授業（創傷治癒の過程と正しいケアの方法）を行った。高校生が生活上役立つように、切り傷や靴連れ、熱傷に対する正しい治療、過去との違いなどを、高校生のレベルに合わせ講義した。
関連病院看護部　最近の大学生の傾向と指導に関する講義	2018年～	学生指導から新人教育に対する臨床の悩みを中心に臨床からの依頼があった。最近の若者の特徴を知り、OJTや実習指導に役立てたいという目的で企画されたものである。現在の大学生の傾向とその根本にある原因や、実際の指導においての留意点や、すぐに役立つよう実践例などを講義した。
関連病院卒後研修への出向	2019年～	卒後研修（新人からラダーレベルⅡまで）の研修で、実務指導や知識に関する講義等、依頼に合わせ実施している。指導には学科の教員の出向を呼びかけ、大学から臨床のシームレス化を図ることに貢献した。研修の企画から参加し集合教育、個人指導、実務試験などに関わった。
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 看護師		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 済生会宇都宮病院		外科病棟4年目から臨地実習指導者となり、看護学生の受け入れ、授業など看護教育に関わることとなった。指導者としては済生会本部で実施している臨床指導者講習会を受講した。以後NICUに異動になってからも引き続き臨地実習指導者として退職まで任務にあたった。その間主任となりファーストレベルを修了、1998年に厚労省認定の看護教員養成講習会を修了した。
国際医療福祉大学		助手では主に成人領域実習（急性期/慢性期）、老年領域実習を担当した。助教になってからは成人領域となり主に急性期の授業、演習、実習を担当した。講師となってからは成人看護学の急性期の方法論、がん看護、技術演習、看護過程演習、急性期実習の科目責任者となる。また全学での関連職種連携教育（演習、実習）を各5年間担当した。シミュレーション教育については、臨床からの要請もあり合同のSIM運営委員会のメンバーとなり基礎看護教育、実務者研修などの運営に関わった。

4　その他 看護系大学教員向け課題解決型研修		千葉大学大学院看護学研究院付属看護実践・教育・研究共創センターにおける問題解決型研修を受講。全国の各大学から各自自身の職務上の課題を、ディスカッションを通して解決に導く研修。約1年間、Zoomでの研修であった。自分の課題としては卒後研修への学科としての協力を環境の調整や職務として大学に認めてもらうなどの対策をとった。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）5年分				
医療・福祉系大学における一次救命処置に関する意識調査　救命場面を想定した救命行動における推測（原著論文）	共著	2019年3月	国際医療福祉大学学会誌18巻4号（215-219）	入江浩子、森川奈緒美、糸井裕子 医療・福祉系大学学生3827名に対し、想定された救命場面での一次救命処置に対する認識を把握し、教育的示唆を得ることを目的に、無記名による自己記入式質問紙調査を行った。学科間における一次救命に対する知識・自信の程度は看護学科が有意に高い結果となった。その認識の違いは、講義・講習の実際と職種の役割によることが考えられ、また、確実な救命行動を実施できる者の育成のためには、医療者としての自覚と、全学を挙げた継続的BLS教育が重要である。
国内文献にみる看護系大学における教員の課題について（原著論文）	共著	2019年8月	国際医療福祉大学学会誌24巻2号（61-72）	鈴木由美、金子順子、入江浩子、森川奈緒美、松本政人、林圭子、小野崎美幸 目的は:国内文献において、看護系大学の教員を対象とした研究を通して看護教員の課題を検討すること。医学中央雑誌刊行会WEB版、CiNii Articlesを用い、キーワード「看護系大学」「看護教員」で80件の文献。看護系大学の増加により、臨地実習における課題や教授方法に関する課題が山積し、抽出された文献の半数以上を占めた。特に新人教員の臨地実習における指導能力の未熟性、教師効力の不足が指摘された。経験豊富な教員の参与、Faculty Development(FD)など、教員が大学に定着できる支援が必要である
体表下の硬さによる胸骨圧迫の効果の違い　看護大学生の救命演習に向けて（原著論文）	共著	2020年12月	日本看護科学学会誌40巻（1-4）	入江浩子、森川奈緒美、金子順子 体表下の硬さが看護大学生の効果的な胸骨圧迫にどう影響するのかを検証し,教育的示唆を得るため、看護大学生46名に対し,体表下の硬さの違う床・ベッド上・ベッド上背板使用による胸骨圧迫を行い,圧迫深度,圧迫回数,圧縮の適切な解除率の違いを比較検討した.圧迫深度において,床とベッド上背板使用による体表下の硬さの違いに有意な差がみられた.また,圧迫深度,解除率には性別差による違いがあった.男子学生は,圧迫深度が深く解除率が低い,女子学生は圧迫深度が浅く解除率が高い結果となった.性別による圧迫効果の違いを考慮した胸骨圧迫の演習・講習の重要性,身体特徴や実施時の体勢の是正に対する取り組みが求められる。
（その他）5年分				
国外文献にみる看護教員の職業継続に影響する要因の文献的考察	共著	2019年9月	国際医療福祉大学学会誌24巻抄録号（56）	入江浩子、森川奈緒美、松本政人、林圭子、小野崎美幸、佐藤聖一、金子順子、鈴木由美 看護教員の定着に関する示唆を得るため、PubMedでnurse educator job satisfaction とnursing facultyのAND検索で過去10年間検索し職業継続、定着及び移動に関する記述がみられたものを抽出し11件を対象に文献内容を検討した。国外においても看護教員は不足しており、高齢化が理由で定着が困難な背景が読み取れた。給与などの衛生要因も侮れない。この状況の改善が必要である。

国外文献にみる看護教員の職務満足に関する研究 Faculty Developmentに関する文献的考察	共著	2019年9月	国際医療福祉大学学会誌24巻抄録号（59）	森川奈緒美、松本政人、林圭子、小野崎美幸、佐藤聖一、金子順子、鈴木由美、入江浩子 看護教員の職務満足の要因のうち、Faculty Development（FD）に関する国外文献検討を行った。PubMedでnurse educator job satisfactionとnursing facultyのAND検索で過去10年間検索しこれらから看護教員のFDに関する記述がみられた7件を対象に検討した。FDは国外においても専門職としての満足度を高めるためにも有益、教育や臨床の質を高めるためには必至である。FDは日本国内ばかりではなく、国外でも重要であり、看護系大学の教員の定着への意義がある。
体表下の硬さによる心臓マッサージの効果の違い 看護学生の救命演習に向けて	共著	2019年11月	日本看護科学学会学術集会講演集39回（PA21-4）	入江浩子、森川奈緒美、金子順子 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 看護学生の救命演習における教育的示唆を得ることを目的に、床 上、ベッド上、ベッド上背板使用時における心臓マッサージの効果の違いを比較し、体表下の硬さが心臓 マッサージにどの程度影響するのかを検証した。看護学生46名（男子20名、女子26名）。蘇生用モデル人形とsimpad（ Laerdal社）を使用し①床上②ベッド上③ベッド上背板での2分間の心臓マッサージ中における 圧迫深度・圧迫回数・圧縮の適切な解除率を測定し比較検討した。分析は平均値±標準偏差および分散分析（多重 比較の調整: Bonferroni）。圧迫深度において、基礎体力、持久力等による性別差は大きく、女性が2分間の心臓マッサージを続ける ことは至適圧迫深度を得られず、効果的な心臓マッサージを行えないことが明確になった。圧迫深度には床と背板使用時の「沈み」「やりづら さ」が大きく影響している。床と背板使用における圧迫深度と解除率において男女差がみられた。心臓マッサージにおける床と背板使用時の体表下の硬さの違いに差がみられた。
先行文献にみる看護系大学の学生における就職活動	共著	2019年11月	日本看護科学学会学術集会講演集39回（PA25-2）	林圭子、森川奈緒美、鈴木由美、田代恵美 看護系大学の学 生の就職活動を概観するために、先行文献を検討した。 医学中央雑誌 WEB版にてキーワード「看護学生」と「就職支援」9件、「就労支援」6件、「就職活 動」68件で、本研究目的に見合うもののみに限定し21件。それらを精読してコード化した ものを分類し、共同研究者らが協議を重ねて類似例を一つの群とみなし、カテゴリー名を命名。「臨地実習の影響」「病院見学・インターンシップ」「看護部の印象」などからなる【施設内を実際に知る】、「職場環境」「福利厚生・ワークライフバランス」などからなる【衛生要因】、「ホームページ・イン ターネット情報」「病院の規模」「地縁・立地条件」などからなる【施設のアウトラインを知る】、「専門性へ の期待」「卒後教育・キャリア支援」などからなる【施設の発展性】「奨学金の縛り」「特定の診療科以外」な ど【就職活動の消極的要因】など4つのカテゴリーが見出された。教育側は学生の背景を踏まえ、定着できる施設かどうか共に考えるなどの支援が必 要であると考える。 結論：様々な施設の魅力を情報収集し、実際に見て、総合的に学生が判断できるよう教育側が支援できることが 望まれる。
看護大学生の効果的な一次救命演習に向けて　性差による胸骨圧迫深度と解除深度の経時的変化の比較		2020年11月	国際医療福祉大学学会誌25巻抄録号（50）	入江浩子、森川奈緒美、金子順子、松本政人、毛塚良江、蜂谷有加、佐藤純也、小野崎美幸 性差による胸骨圧迫深度と解除深度の経時的変化を比較することによって、看護学生の一次救命演習における教育的示唆を得ることを目的とした。女子の圧迫は5cmに満たない場合もある。また変動係数は男子と比較し範囲が大きく、時間の経過とともに「ぶれ」が生じ安定した圧迫ができない可能性がある。男子は解除深度が深く、胸壁に力が残っていることが推測された。胸骨圧迫深度と圧迫介助を両立させることの難しさを認識した。

身体的特徴と体制における胸骨圧迫の比較		2020年12月	日本看護科学学会学術集会講演集40回（P6-002）	入江浩子、森川奈緒美、金子順子、松本政人、小野崎美幸、蜂谷有加、毛塚良江 身体的特徴と実施体勢が胸骨圧迫効果に関連する のかを比較検討した。A 大学看護学生 57 名を対象に身体特徴（身長・体重は自己申告、握力・上肢長・下肢長）と２分間の胸 骨圧迫①対象者の側面に両ひざをつく②対象者の両大腿部付近を実施者の両足で挟む（跨ぐ）体勢による胸骨圧迫 中の圧迫深度、解除深度を simpad（レールダル社）によって解析した。実施体勢と圧迫深度・解除深度の比較に T 検定・変動係数、身体的特徴と圧迫深度の関連に相関分析を用いた。男子学生の実施体勢と平均圧迫深度・平均解除深度に有意な差は見られなかった。女子学生の平均圧迫深 度は②が有意に深かった。実施体勢①・②による胸骨圧迫深度の変動係数は、性別に関わらず②のほうが低値であっ た。身体特徴と平均圧迫深度の関連性は、男子学生は身長と平均圧迫深度、女子学生は握力と平均圧迫深度に弱い正の 相関があった。体重・上肢長・下肢長と平均圧迫深度に相関はなかった。身体的特徴と胸骨圧迫効果にはほとんど関連性がなく、胸骨圧迫時の身体の安定性が関与していることが 推察された。
関連病院へのイベント参加が、関連病院への帰属意識に与える効果の検証		2021年11月	国際医療福祉大学学会誌26巻抄録号（110）	森川奈緒美、林圭子、蜂谷有加、柿沼加奈恵、佐藤純也 実習ではなく病院で何か役割を持つことで、自分が関連病院の一員であることを認識し帰属意識の高まりを期待し、この動機づけが学生の帰属意識に与えた影響についてアンケート調査を実施した。大学の帰属意識を測定する尺度を用い、イベント参加組とそうでない組に対し「愛着」「同一化・内在化」「ブランド」「規範・世間体」の4項目をｔ検定で差があるか確認した。ｔ検定による差は見られなかったが聞き取りを質的に分析してみると動機づけは有用であったことから期待できる取り組みである。